

保育の難しい時代に

関口はつ江

このところ、著しい生活環境と世界情勢の変動の中で、価値観や目的が揺れ動き、生活の足場が定まりません。先が見えにくく、過去が役に立ちにくい状況の下で、確かな信念をもって幼い子ども達を育て上げることが、如何に難しいかを実感することの多い昨今です。

難しさの第一は、子ども自体が年々変化しており、その変わり方が大きくなっていることです。子どもの本質は変わらなくても、その表れ方は大きく変化しています。これが幼児かと驚くほど、一般的な幼児の概念では捉えにくい幼児の姿があります。

恐らく大人の価値観や生活の仕方を直接受け取ってしまい、幼児特有の生活ができていないものと思われれます。

第二に親の変化です。能動的な「育てる人」としての親ではなく、共に生活を楽しむ人、或いは子どもに喜びを与えて貰いたい受け身の人になりつつあります。「子どものため」よりも自分自身が安心したり、満足することを優先します。例えば、親から離れにくい子どもに根気よく付き添って保育に慣れさせるよりも、強制的に引き離して、早く自分が解放されたいなど……。

今の保育の現場では、親は保育者と共にこどものために考える協力者になるより、逆に保育者が親の要求や悩みも引き受けなければならないことも少なくなく、保育者の負担は倍増しています。

第三に、保育者自身も保育観が十分には確立しておらず、教育的な方向性が出にくいことです。幼児の発達の過程や保育の技術は学習していても、知識、技能を何に向けて生かすかについてはよく見えていません。

こどもを尊重すること、共感すること、遊ぶこと、いろいろ教えることなど、すぐ目の前のねらいに対しては熱心に対応できるのですが、そのことがこども全体の育ちにどう寄与するかの見通しが立たないために、その場しのぎの対療法的な指導になりがちです。

こうした課題満載の現状は、保育に限ったことではなく、今の社会ではいずれの分野においても同じ

ことが言え、世界中が混沌の中にあるのでしょ。価値の多様化の名のもとにあれもよし、これもよし、の風潮もあります。それでもよく、むしろ多様性が望ましい領域もあります。

しかし、人間形成については、基本は守られるべきだと思えます。幼児期に教育されるべきことは、ごく当たり前の日常的な温かい人間関係であり、自然の恩恵を実感することであつたりですが、それらの体験を通して社会の一員として、また自然と共存する生活者として、節度ある態度で自己を発揮できるような人間性の基礎をつくることなどは必須事項でしょう。

迷いの中の若い保育者が安心して正当な保育ができるためには、強力な精神的バックアップが欲しいのです。保育関係者の総意の結集が求められる現状ではないでしょうか。

(郡山女子大学短期大学部・同附属幼稚園園長)